

ラトガース大学と福井との歴史的関係

福井大学国際地域学部特任教授
公益財団法人日下部・グリフィス学術・文化交流基金理事長

ほそや りゅうへい
細谷 龍平

ラトガース大学は1766年、米国の植民地時代に創設された全米でも最古の名門大学の一つです。オランダ改革派教会が母体となったその設立以降の初期は様々な浮き沈みがあったのを経て、百年後の1866年には、福井藩から、まず横井小楠の甥二人が、次いで翌年日下部太郎がラトガースに留学生として派遣されます。これは明治維新に先立ち、オランダとの長崎を通じた特別の縁と松平春嶽公の卓見によって実現したもので、日下部は歴史上初めて欧米の大学を卒業した日本人の一人となりました。周知のとおり卒業の直前に結核のために夭折しましたが、成績が飛び抜けて優秀だったことから、卒業資格と、全米大学の優等生だけが参加できる友愛会ファイベータカップの称号も受けたのでした。注目されるのは、日下部太郎は福井にとってのみならず、ラトガース大学にとってもいわば国際化の象徴となる伝説の留学生だったということです。

そしてさらに重要なことは、日下部の死を受けて、福井藩の招請で訪日したウィリアム・E・グリフィスが、単に日下部にラテン語を教えたという師弟関係のストーリーには止まらない偉大な足跡をその後に残したという点です。自身がラトガースの優等生だったグリフィスは、維新直後の福井と東京で欧米的教育の振興に尽くしたのみならず、米国に帰国後、日本とアジアを広く紹介する文筆と言論活動を極めて勢力的に行いまし

た。日本に関する代表作の「ミカドの帝国」は、明治から昭和初期にかけての欧米の日本理解の基礎をなすベストセラーとなりました。そこでは日本の歴史と文化社会に対する深い洞察と敬愛の情が横溢しています。

この福井県の国際化の歴史的原点ともいうべき日下部とグリフィスの物語はその後次第に忘れられては復活するというサイクルを繰り返してきています。1927年に83歳の老グリフィスが日本と福井への再訪を果たして大歓迎を受けたこと、そしてその後大戦を挟んだ低迷期を経て、1970-80年代に至り、朽ち果てていた日下部太郎の墓を福井青年会議所などの関係者が発見、これを再度の復興につなげたことが想起されます。1981年には、福井大学もラトガース大学との最初の学術交流協定（基本

協定）を結びました。これに基づいて学生の交流や両大学図書館間の協力がしばらく続きましたが、全体としての交流活動は再び低調となっていました。

2016年、本学に国際地域学部が設置されたことを契機として、両大学間の関係は現在三たび復興期を迎えています。即ち2017年には基本協定を改訂、2018年に学生交換協定、そして本2019年、今般の医学部間協定の締結と、両大学間の関係は全学的広がりを持つに至りました。これがさらに、福井県、福井市や日下部・グリフィス学術・文化交流基金など、学外の県内関係団体との連携も含めた日米交流の広がりに発展し、代表的なジャパノロジストとしてのウィリアム・グリフィスの再評価にもつながって、三度目の正直となることを祈念しています。



ラトガース大学メインキャンパスの最古の建物Old Queens、ウィリアム・グリフィスと日下部太郎

ラトガース大学医学部訪問記

医学部長 ない き ひろ のぶ 内木 宏延

ラトガース大学医学部は、ニュージャージー州ニューブランズウィック市にある。同市は人口55,000人ほどの小都市で、ニューヨーク・マンハッタン Penn Station からニュージャージー・トランジット・トレインで1時間ほどの距離にある。私は昨年7月24日～30日、前後にニューヨーク滞在を加えラトガース大学を訪問した。目的は医学部間交流協定締結、今から思えばやや無謀なひとり旅であったが、多くのことを感じ、外交成果も上がった。ここでは交流協定の内容、意義、今後の方向性を中心に、旅の記録も含めて記すことにする。

24日火曜日の午前、ジョンFケネディ国際空港に到着した。私はひとり旅が好きで、現地での移動は全て公共交通機関を使うことにしている。今にも壊れそうなニューヨークの地下鉄に乗り、ブルックリンにあるワイズホテルを目指した。ブルックリン地区はイーストリバーを挟んでマンハッタンの東にあり、ウェストサイドストーリーに描かれた危険なニューヨークと洗練された町並みの混在した、いわゆるgentrificationのつぼである。ワイズホテルは元倉庫を改装したおしゃれな空間で、部屋の広い窓から眺めるイーストリバー、その向こうに広がるマンハッタンの摩天楼は感動的であった。

25日水曜日は大きなトランクを引き、地下鉄、ニュージャージー・トランジットを乗り継いでニューブランズウィックに到着した。同市はどこにもありそうなアメリカの地方都市といった感じで、どこでも歩いて行けた。曇り空を背景にした遠景はホテルの窓から見た市街地、近景は日下部太郎の下宿近く、ジョージストリートとチャーチストリートの交差点である。

いよいよ26日木曜日の朝、グローバルヘルスオフィス Associate Dean のエスコバル教授（コロンビア出身の男性）、Assistant Dean のリン教授（台湾出身の女性）がホテルに迎えに来て下さり、交渉がスタートした。エスコバル教授は精神医学と家庭医学が、リン教授は家庭医学とコミュニティーヘルスが専門である。オフィスに着くと早速MOU (Memorandum of Understanding 交流協定覚書) に関する具体的議論が始まった。この日最も印象に残ったのは、福井大学医学部を紹介するセミナーである。坂野先生の神経科学や老木先生のチャネル学、高エネルギー医学研究所や子どものこころの発達研究センターなど、医学部のハイライトを順に紹介していった。どれも彼らの興味を誘ったが、彼らが最も関心を持ったのは、林先生の総合診療・救急医学を

一体化したER、高浜町寄付講座での井階先生の活動（ソーシャルキャピタル、CBPR: Community-Based Participatory Research）であった。エスコバル教授によれば、ラトガース大学はCBPRの草分けだそうである。これらの活動がわれわれの理念『愛と医術で人と社会を健やかに』”With Love and Medicine, Making People and Society Sound”、特にその後半と響き合い、彼らのグローバルヘルスやコミュニティーヘルスに対する理念とも共鳴した様であった。

交渉は27日金曜日も続いた。わずか2日間でMOUを仕上げる事が出来たのは、14時間の時差のお陰である。26日夕方、ラトガース側から提起された数々の疑問点、問題点を日本にメールした。日本は27日の朝であり、国際課のスタッフが1日をかけて問題点を修正し、その日の夜に修正したMOUをメールして下さった。私が27日の朝目覚めるとメールが届いており、これを予めエスコバル教授にメールしておくことにより、その日の交渉はトントン拍子に進んだ。国際課の的確な後方支援に感謝するばかりである。

今回の交流協定は主に医学部学生の相互訪問を目的としている。まずは今年4月、医学科6年次生2名が1か月の臨床研修に渡米する。将来はラ

トガス大学医学部の学生を本学に受け入れることも計画されている。エスコバル教授の以下の言葉はとても印象的であり、初めてラトガスを訪問する2名の学生にもそのまま当てはまる。「ラトガスでは医学部学生を積極的に海外研修に送っています。全く異なる文化、全く異なる医療制度の中でどの様に医療が行われているのかを見聞することは、彼らの将来に大きな影響をもたらすと思います。これこそがグローバルヘルス教育です。」この教育理念に基づき、学生の相互交流が盛んになり、教員の交流も活性化することを願うばかりである。ラトガス大学は歴史的に見ても重要な国際交流のパートナーであり、今年2月に発足した医学部等国際交流委員会を中心に、戦略的に交流が進展することを期待したい。

28日土曜日、アメリカ最後の晩はロウアーマンハッタンにあるビークマン・トンプソンホテルに泊まった。建物は100年以上前のもので、口の字型に並ぶ客室に囲まれた吹き抜けのアトリウムが美しく、旅人はしばしばニューヨークの歴史に包まれた。



ニューブランズウィック遠景



日下部太郎の下宿近く



ビークマン・トンプソンホテル